Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-07

坂江渉編著『風土記からみる古代の播磨』

森岡, 秀人

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,1:127-131

(Issue Date)
2009-08-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001662

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001662

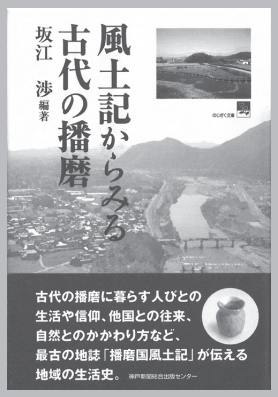
時評・書評

坂江渉編著『風土記からみる古代の播磨』

森岡　秀人

全国各地には、その地域の歴史や文化を知る上に欠かせない幾多の地誌類があり、旅の折々や研究の上で紐解くことが多い。元明天皇の詔により、和銅六年（七一三）五月二日に畿内七道諸国に対して出された『続日本紀』所載の官命により国単位に作成の歩が進んだ「風土記」は、その最古の地誌であり、読者の多くは若かりし日の教科書でその存在を知る。現在、「風土記」としてまとまった形で残されているものは、常陸・出雲・播磨・肥前・豊後の五ヶ国のみであり、その有る無しが在地社会を対象とした古代史研究にとって決定的な差をもたらしている。それは、兵庫県下の播磨と風土記が伝わらなかった摂津・丹波・但馬・淡路の四国を比較して即座に了解されよう。赤穂や明石の地域の一部を欠くものの、播磨はそれだけ豊かな一等の古代史料に恵まれているのである。「風土記」の撰上は、制度豊かな中国隋・唐の模作に端を発したにせよ、纏め上げようとする意気込みは地理志の列島的総括が初めて目指されたものであり、自ずと撰上提出者の身分や個性、好みや基盤資料の時間的格差、土地土地の持つ地域性が反映されたであろう。修史の編纂の機運とも見合う八世紀前半という時期をあらためて考えさせる。

坂江渉氏（神戸大学）がこのたび編まれた『風土記からみる古代の播磨』は、兵庫県の西部に位置する播磨地域に特化したものだが、コンパクトに仕上がったその最良の手引き書であり、今も持続進捗しつつある調査と研究の節目に出版されたものである。一読すれば、風土記自体に直接接しない方々にもその味読がどれだけ多くの歴史情報をもたらし、日頃の古代観に変革を迫るものであるかに驚かされるであろう。そ



坂江渉編著
『風土記からみる古代の播磨』

神戸新聞総合出版センター
2007年3月発行
B6判　262頁
税込1,575円

れまで食わず嫌いに過ごしてきた人にとっては、きっと『播磨国風土記』の原典にあたることを欲せざるを得ない心境に駆られるに違いない。魅力ある本書の叙述内容の要因は数多く挙げられようが、先ずは八人の執筆者（編者の坂江氏と井上勝博・今津勝紀・高橋明裕・中林隆之・古市晃・松下正和・毛利憲一の各氏）が目下古代史界で活躍する中堅や若手の研究者であり、それぞれが地域研究の実践者であって、言わば足と目を使って現地踏査の基盤の上に立って風土記の世界を卓抜に描き出しているからであろう。勉強会を何度も開き、討議の蓄積の上に書き上げられたことも、より一層フレッシュ感を漂わせており、全体を通して歯切れのよい文体とともに最新の研究成果や関わったテーマへの主張がひしひしと伝わってくる。と同時に、関連史料を巧みに動員して背景の肉付けを試みており、現今の日本古代史の研究水準の公約数的なことを門外漢が学ぶにも絶好の書なのである。

構成上の大きな特徴は、縦横な切り口を数多く用意し、抵抗なく関心ある分野から風土記の世界へと誘っている点だ。第一章では、人々の食生活や婚姻などを取り上げた「暮らしと衣食住」をテーマに、当時の家族の動態、劣悪な生活環境、山に対する感性豊かな思い、信仰、婚姻儀式の役割も想定される歌垣などに鋭くメスを入れる。「信仰と宗教」を扱った第二章では、播磨の住人、高麗恵便が初期仏教の導入に大きな関与を示すが、賀古郡から印南郡一帯に勢力圏を有する吉備氏系の氏族の介在を説き、記載の寡少な聖徳太子との繋がり、秦氏伝承、式内社の内実などに筆が及ぶ。また、播磨の国つ神の頭、伊和大神と三輪山の神との関係や揖保郡桑原里琴坂と飾磨郡伊和里琴丘・琴神丘の二つの地名説話の背景に神招きの場を読むあたりの解もわかりよい。第三章「国土と自然環境」には、「針間」とも記した国名の由来から当時の国造の勢力までを触れ、各地の風土記にも散見される巨人神が播磨でも国作りに励むようすを描いている。水害・地震は近年、現代兵庫にも壊滅的な打撃を与えたが、古代人の災害観も看過せず、取り上げている。

第四章の「動植物とのかかわり」に登場する聖獣としてのウミガメと海洋信仰、呪力をもつとみなされた柏の葉、染色と深く関係した中臣藍連氏の存在、各国の貢進薬物との一致をみる風土記記載の薬品素材の他、木材の大供給地の一つが播磨であったことなども教えられる。第五章は「政治と社会」に踏み込み、六世紀以降に実相が顕在化するミヤケの設置、とりわけ鉄生産と関わりの深い志深ミヤケ、美作や吉備との

交通上の要衝、越部ミヤケなどが取り上げられ、揖保郡成立の由来地名である揖保里と粒丘に着目し、丘の上の神食の際落とした「飯」の「穂」を辿り、その神話の前提たる「国占め」の儀礼の解明へと筆を及ぼす。「素朴でユーモラスな叙述」の背景が巧みに復元されており、有効な仮説をいくつも打ち出している。国司以前の地方官を示す「大夫」称を持つ国宰の役割や活動の一端が知れる風土記の重要性が窺え、彼らが地名の変更と関わった点が地方支配の実態ともリンクして注意をひく。

「交通と地域間交流」を主題とした第六章は、冒頭吉備と播磨の国境確定の動きを論ずるが、当初、加古川とされていた経緯を風土記説話と同族伝承の共有、山部管理の共有、本来の任地が吉備とされる石川王が播磨に名を残す理由として、吉備大宰の管轄が播磨西部に及ぶことは注意されてよい。また、海を隔てて和泉国との交流を示す伝承や石棺製作をめぐる播磨と讃岐との関係、播磨における物部氏や蝦夷の活動も見逃せない。播磨をめぐる人と物の動きは多方面に及ぶ。最後に置かれた第七章「ミナトと瀬戸内海」は、播磨国の地理的特性をよく描写している。海上交通の実相は要地としてのミナトの存在、官船の諸儀礼、島神への信仰など特筆すべきことを充てている。

＊

風土記は正直言って記紀に対して古代史料としての活用は振るわない。それは残存が先述した五ヶ国という著しい地域的偏重や舞台が中央政治の場から遠隔の地にあって、元々官命自体が特産物や山川原野の地名の由来、古老の伝承する旧聞異事の記載に重きを置いている点などが一斑をなしており、官庁間の解文形式（上申文書）を採っている点を含め、日本古代の政治史や行財政史の分野では着目度が低下するからであろう。しかし、だからこそ、社会生活の底辺で活動する古代の地方の民の姿や風俗・習慣、心理や伝承が生々しく活写されており、大自然を背景に日々を生きる人間や生息する動植物の躍動感が伝わってもくる。また、研究者の中には『日本書紀』との一方的ではない影響関係を説く方もおられ、その成立過程の研究そのものが古代史のダイナミズムを保持している。鹿が登場する一〇例程の地名起源伝承には、遠く銅鐸や弥生土器に描かれた絵画の中の鹿に対する弥生時代の人々の心性が形を変えつつも世を経て伝わってきたことを感得させ、ヒントを得てそれを引く考古学者も多い。聖なる獣、

鹿への信仰、鹿と纏わる農耕儀礼は長い歳月、人伝え、土地伝えに基層に流れ、生命力豊かに物証を残す。いま一つ考古学で注目される製鉄や鉄器生産の問題では、播磨は弥生時代後期以降重要視される。近畿中枢に鉄の文化をもたらしたのは、おそらく北淡路や西播の初期鍛冶技術者の関与があってのことだろう。とくに宍禾郡と讃容郡は風土記や出土文字史料にも裏付けられ、加古川以西を吉備圏とみなす古代の認識は、鉄の生産についても地域関係に共通項がありそうである。執筆者の中には、埴輪祭祀への関心も高い。なお、律令制下の村については地方行政機構のありようを考える上に避けて通れないが、風土記個々で扱いが異なる。郡境や河川流域に多くの村が確認できる『出雲国風土記』（七三三年完成）に対し、『播磨国風土記』では、『常陸国風土記』などと同じように、村とやや混同ぎみに里や郷の地名起源説話が作られており、『豊後国風土記』や『肥前国風土記』では、「此村」が郷や里の代行として用いられている部分が看取される。また、交通のポイントとして、村が要となる島や駅家設置場所と絡むケースもみえ（『常陸国風土記』）、式内社と村の結び付きなど多様な側面が逸文中に確認できるなど、風土記から分析可能な村の実態に個人的には興味を覚える。

＊

本書を読んで興味深いことは、医療や特産品、信仰、経済事情、住環境、人口問題など、現代社会の現実とも容易に触れ合う問題が各章に鏤められているからであろう。古今東西、庶民生活に付き物の病、災害などに対する恐怖感、恋愛、食への拘り、官吏への憧れなども意識をもって叙述されている。そして、地名の謂われが神や天皇が物を落としたことに求める事例がかなりあるというのも意外と知られていない事実だ。地名を辿って遺称地探しへと好奇心が自然と向う読者もきっと多かろう。風土記には古墳も興味深い伝承とともに登場し、本書の各所で官衙・駅家・寺院・集落などの遺跡、考古資料との連関にも触手を伸ばす努力が払われている。広域軍管区に包括して備中鬼ノ城や播磨城山城の共通性を見出す視点なども古代山城の築城体制として首肯し得ることである。渡来人、渡来文物研究の到達点をよく踏まえ、配慮した記述も多い。時々挿入される写真の多くは、古代播磨の原風景を垣間見させてくれており、想像を膨らませた読者は現地探訪の意欲と行動を起こさずにはいられない。そして、全編を通じて古代人の卓抜な空間認識といったものを感じさせ

る。地方に伝承された神話の見直しの重要性も強く訴えられている。現存する地形は旧状の改変も顕著であるが、ピンポイントで残る原風景を点綴しつつ風土記の世界に可能なだけ接近する試みには、学ぶべき方法が多々存在する。

風土記には、視点を変えれば、遠方の地域を横断して捉えることのできる共通項も見いだせる余地があり、地域の古代社会像や民衆の生きざま、考え方を広く全体として俯瞰、比較することができる。自然環境や社会生活が著しく変貌を遂げようとしている二一世紀、チャレンジ精神旺盛で地域に拘った深淵なる掘り下げは、今後も際限なく続けられることであろう。他分野との学際的な取り組みも目指され、調査・研究がさらに進展し、現代と古代を繋ぐ架け橋としての本書の続編が、二冊、三冊と世に出ることを鶴首して待ちたいと思う。